

ここまで成長した 但馬高原大根の産地

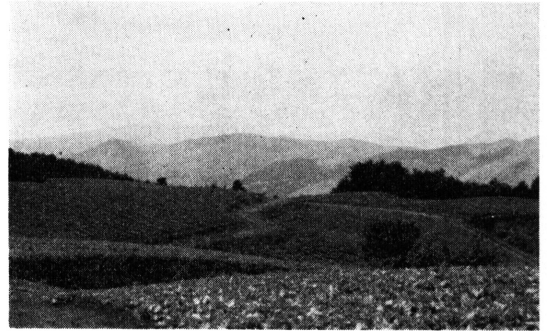
兵庫県和田山農業改良普及所
普及主査 (前八鹿農業改良普及所)

宮垣 義己

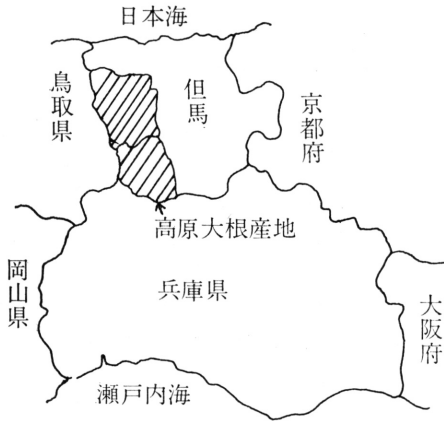
1. 高原大根産地化の経過

但馬高原大根の産地は、第1図のように兵庫県の北部に位置し、標高500~800mの山岳地帯にあり、京阪神市場へ2~3時間で行ける近郊地にある。高原大根が入るまでの状態は、昭和30年頃までは養蚕、和牛(但馬牛)、水稲、木炭で生活していたが、それ以後、日本の経済成

但馬高原大根産地の状況



第1図 但馬高原大根の産地位置



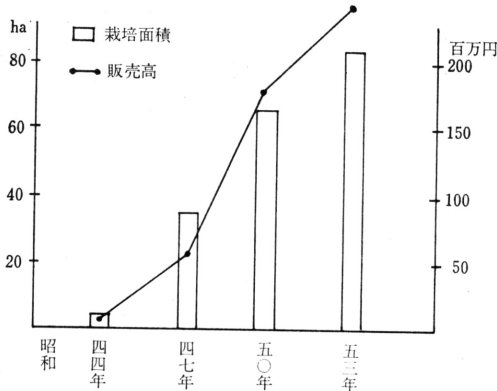
長とともに若者は都会へ流出し、冬場は出稼ぎに出て、過疎化が進み、社会的な問題となっていた。これらの問題解決の方法として以前から考えられていたのは、豊富にある山の活用である。これについてはいろいろなことが試

みられたが、地域産業として定着したものはなかった。

幸いに、高原に平坦で土層も深く、土質の良いところがあり、この活用をあらゆる面で検討した結果、夏大根を選定した。

特に選定の理由として、土質が良いこと、京阪神市場に近く、鮮度の高いものが供給できること等で、試作をした結果、予想以上に品質の良いものが収穫でき、価格も高く販売できた。これによって地域から大きな期待が持たれ、これを本格的に産地化すべく、高原の本格的な開こんに手がけられた。

第2図 高原大根の栽培面積と販売高



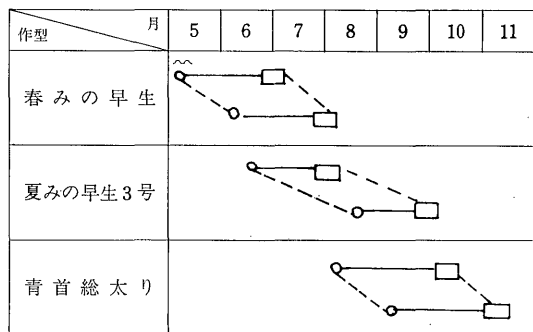
但馬の高原大根は養父郡と美方郡にわたって栽培されており、昭和53年度の実績は面積83ha、販売量3,000t、販売金額25,000万円をあげている。この高原大根で、現在、自立農家が55戸生まれ、農業後継者も16人でき、活気のある地域産業として定着してきた。

但馬の高原大根の経過は第2図のごとくで、約10年間に面積が急速に伸び産地化した。今後も県営農地開発事業により、さらに25ha拡大し、100haになるのも時間の問題である。出荷先は神戸、姫路の県内市場で、鮮度が高く好評を得ており、市場からも期待されている。

2. 作型と栽培技術

高原大根の作型は、春まきのマルチ栽培から、11月の青首大根まで長期間連続出荷している。品種は、春まきは春みの早生から、盛夏どりは夏みの早生、秋どりは青首総太りを作付けしている。

第3図 但馬高原大根の作型



○播種 □収穫 ~マルチ

栽培技術については、まず根の作物であるので、土壌の深耕と細土に留意するとともに、有機物の投入に努めている。有機物の確保については、大根の作付跡に牧草を播き、雑草を防ぐとともに、残った肥料を有効に活用して、牧草を作り、この牧草を畜産農家へ提供して、畜産農家から堆肥を確保している。

肥料は第1表の通り、生育期間が短いために、速効性の硝酸加里を主体に使っている。

土壌の状態(地力)、作付時期(雨量)、品種により、肥料の量を20~30%加減する。特に施肥するうえで注意することは、量が多くなると、追肥を多く施さないことである。畦巾は120cmとして整地する。この際畦の高さは30cm以上とし、畦の上からの耕土深は40cm以上になるようにする。

第1表 施肥量 (10a当)

	雨の少ない時		雨の多い時	
	元肥	追肥	元肥	追肥
B M 溶 磷	60kg	--kg	60kg	--kg
硝酸加里604	50kg	20kg	70kg	20kg

N 11.2~14.4kg, P 19.0~21.1, K 9.8~12.6

病虫害防除は第2表の通りで、キスジノミハムシ予防のために、ダイジストン粒剤を10a当たり6kgを播溝に散布する。

播種はシードテープと播種機で行ない、1か所に2~3粒づつ23cm間隔に播く。間引きは、本葉が2~3枚の時に1本とし、間引きと同時に、双葉のつけ根まで土寄せを行なう。

病虫害防除で、特に軟腐病とコナガ、ヨトウムシが問題となるが、いずれも発生前の予防が大切であり、定期的に防除することが必要である。

萎黄病は、2~3年前から発生をみており、他の野菜との輪作や、土壌消毒で対処している。収穫は適期に行なうことが、品質の良いものを獲る秘訣である。

大根はヒゲ根を取り、水洗いし、ロンネットに10本束で結束して出荷をしているが、この作業についてはシス

第2表 病虫害防除基準

	薬 剤	薬剤と方法
キスジノミハムシ	ダイジストン粒剤	6kg整地後
軟腐病	デラント水和剤	500倍 生育中3回
ヨトウムシ	ランネート水和剤	1,000倍
コナガ	オルトラン水和剤	1,000倍
萎黄病	土壌消毒剤	灌 注

テム化しやすく、共同化することが能率を高めやすい。

次に高原大根の品質を高めるための技術として、ス入り、曲り、岐根、硼素欠乏を防ぐ必要がある。ス入りについては、生育をスムーズにし、肥切れのないように、適期収穫をすることが重要である。曲りについては深耕し、生育初期の土寄せを充分にし、栽植密度を適当にし、追肥(全体の量も)を多く施さないことである。岐根については、未熟堆肥を施さないこと、虫害等根に障害を受けないようにすることである。

硼素欠乏対策については、土壌pHを6.5以上にしないこと。土壌が乾燥したり、生育期間が長びく時は、硼砂400gを水120ℓに溶かして葉面散布する。

pHが6.5以上の場合、播種後なるべく早く、硼砂1kgを、水が湿った土に混ぜて条間に散布する。

以上、作型と栽培技術について述べたが、経営的には生育期間50日足らずで10a当たり労力20人で売上げ30万円、所得で15万円程度の平均となり、1日当たり労働報酬は7,500円となっている。良い家では日当1万円以上と、1戸当たり年間所得500万円以上をあげている。

この経営事例のなかに、集落ぐるみの協業経営で取組んで成功している、農事組合法人上山農場がある。

3. 今後の課題

(1) 連作障害対策

2~3年前から、萎黄病の発生をみて、国の連作障害防止対策事業により対策を検討中である。

いずれにしても、適切な防止対策が急務で、積極的に土壌消毒、予防的には、他の野菜との輪作体制を確立し、大根の作付けを自主規制することが重要な課題である。また土作りに努め、無理のない作付けが必要である。

(2) 高原大根中心の輪作体制の確立

高原大根は有利であるが、労力が夏場に集中しているので、無理をして作ると、連作障害が発生するので、他の野菜との輪作体制の確立が急務である。

(3) 効率と品質の高い産地へ

現在、山成り開こんで傾斜の急な畑地、灌水施設のない所もあるが、これらの改善を進めて、効率の高い、天候に左右されない新産地への脱皮が重要な課題である。